

INFORMATION



《NEWS》

■第 14 回遺跡発表会を開催しました。

7月17日(土)に佐倉市中央公民館で開催した遺跡発表会には、非常に暑い中250名を超える来場者がありました。今回は國學院大学教授笹生衛先生を講師に迎え、「古代の祭祀と捧げもの」という題名で講演していただきました。

なお、当日ご来場できなかった方も、11月30日(火)まで文化財センター考古資料展示室において出土品を展示しておりますので、是非ご覧ください。



《速報》

■成田市船形手黒遺跡、台方宮代遺跡(2)出土「鏡」

今回は成田市船形手黒遺跡、台方宮代遺跡(2)で見つかった5世紀代の鏡について紹介します。写真上の青銅鏡は船形手黒遺跡1号墳主体部から出土し、直径は7cm、厚さ2mm、重さ25gになります。写真下の青銅鏡は、台方宮代遺跡(2)の3号墳主体部から、鏡面を上にした状態で見つかりました。直径は約9cm、厚さ2mm、重さは80gになります。

この2面の鏡は、国外から持ち込まれたものではなく、国内でつくられた鏡と考えられ、そのような鏡を「倣製鏡」と言います。また、中央にある鈕と呼ばれるつまみの周りに乳と呼ぶ突起を配し、その周りを細い線で装飾していることから「乳文鏡」と呼ばれています。

2つの遺跡の周辺は、千葉県内でも古墳時代の鏡が集中して見つかる地域のひとつで、現在は成田ニュータウンになっている公津原古墳群の中の瓢箪16号墳、17号墳からそれぞれ1面ずつ出土しています。また江川を挟んだ対岸に存在した下方丸塚古墳からは、画文帯神獸鏡を含む4面の鏡が見つかりました。さらに、下方内野南遺跡の住居跡からは、5つの獣が描かれた、五獣鏡が出土しています。しかし周囲に多くの古墳がありながら、どの古墳にも副葬されているわけではなく、現時点では印旛沼に注ぐ江川流域の古墳から集中して出土するという傾向があります。この状況が何を意味するのか、また鏡が副葬される被葬者達はどのような性格の人々だったのか。今後の検討課題といえるでしょう。



船形手黒遺跡
1号墳出土青銅鏡



台方宮代遺跡(2)
3号墳出土青銅鏡

《発掘中の遺跡》

10月の予定

- 〈成田市〉大菅向台遺跡第2地点(奈良・平安時代～近世)
- 〈佐倉市〉大佐倉花輪台3号墳(古墳時代)
- 〈四街道市〉嶋越遺跡(第2地点)(縄文時代)

《室内作業》

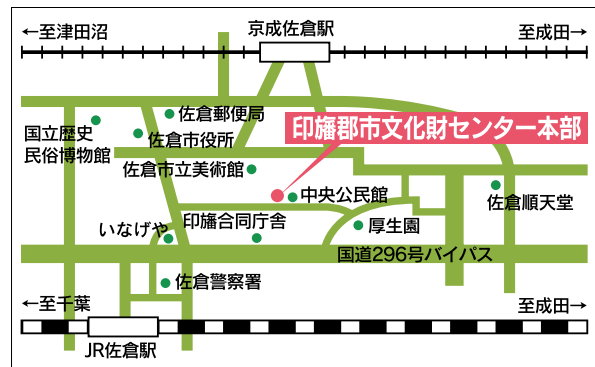
〈本部統合事務所〉

佐倉市鐺木町198-3 TEL. 043-484-0133

- キサキ遺跡5地点(成田市 縄文・古墳時代)
- 台方宮代遺跡(2)(成田市 弥生・古墳・奈良・平安時代)
- 船形手黒遺跡(成田市 古墳時代)
- 道作古墳・馬場遺跡(第5地点)(印西市 古墳・縄文時代)
- 天神前遺跡(印西市 古墳・奈良・平安時代)
- 尾上木見津遺跡(第2地点)(酒々井町 古墳・奈良・平安時代)
- 駒詰遺跡(第2・第3地点)(富里市 古墳・奈良・平安時代)

《おしらせ》

※上記の発掘現場、室内作業は見学できます。ご期待に添えない場合もありますので、かならず、事前にご連絡ください。詳細は本部へお問い合わせを！



発行・編集 財団法人 印旛郡市文化財センター 〒285-0025 千葉県佐倉市鐺木町198-3 ☎043(484)0126(代) FAX043(485)9871
http://www.inba.or.jp (ウェブサイト) http://www.inba.or.jp/l/

■広報誌 フィールドブックvol.31



いん ざい し てん じん まえ い せき

印西市天神前遺跡

みつけた!



▲2号住居跡(古墳時代前期)



▲古墳時代前期出土遺物



▲炉器台出土状況

甕と炉器台の使用例▶
炉の上に3個1セットの炉器台を三角形に配置し、その上に甕をのせます。



天神前遺跡は、印西市小林字天神前に所在する遺跡です。利根川の南岸2.5km、標高29mの台地上に立地します。平成22年6月に発掘調査が行われ、古墳時代の住居跡1軒、奈良・平安時代の住居跡7軒、溝跡10条、土坑14基、中世の台地整形区画1ヶ所などが検出されました。ここでは、現在整理作業中である古墳時代前期(4世紀後半)の2号住居跡を取り上げます。

2号住居跡の規模は5.87m×5.13mでほぼ正方形です。中央よりやや西側に炉が設けられていました。住居内からは上の写真にある甕や壺、高坏、埴、炉器台などが出土しています。これらの土器は破損している部分が少なく、住居跡の床面にごろりと置かれたような状況で見つかりました。当時の生活道具がそろって出土した良好な資料です。写真の炉器台も3個まとまって炉のそばから見つかりました。

炉器台とは、床で火を起こした炉で使用される調理器具です。コメや雑穀類を入れた甕と炉器台を上写真のように組み合わせ、下から火を焚き、煮たり蒸したりしたと考えられます。このような調理方法による炉器台は、現在のガス台という五徳の役目を果たしていました。また、炉器台は炉の中ではなくそばから見つかる例が多いことから、炉に常設されていたのではなく、炉にかけたりはずしたりしていたと考えられます。このことも現在、ガス台を掃除する時などに五徳をはずす行動と似ています。

もしかしたら1600年前の古墳時代と現在の私たちが考えたり行動したりすることは、あまり大きな差がないのかもしれません。

酒々井町 尾上木見津遺跡 (第2地点) ・ 富里市 駒詰遺跡 (第2地点)



尾上木見津遺跡 2号住居跡
(9世紀前半)



遺跡位置図 (1/50,000)



二彩碗



二彩碗の
出土状況



5間×3間の掘立柱建物跡



「奈野」と書かれた墨書土器
(9世紀初頭)



二彩碗底面

尾上木見津遺跡(第2地点)・駒詰遺跡(第2地点)は高崎川の中流に面し、酒々井町と富里市にまたがって位置します。古墳時代前期末から中期にかけての古墳3基、竪穴住居跡14軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡28軒、掘立柱建物跡10棟などがみつかりました。

奈良・平安時代の集落は、8世紀末から9世紀前半にかけてのごく短期間に営まれたもので、直線的に並ぶ大型の掘立柱建物跡を中心に、その建物から一定の間隔を空けて竪穴住居跡が周りを囲むという特徴的な景観を示しています。

なかでも尾上木見津遺跡の2号住居跡から、奈良三彩の碗が出土しました。奈良三彩は、奈良時代に唐三彩の影響を受けて平城京周辺のごく限られた国営工房で焼かれたものです。緑・茶・白の三色のうわぐすりをかけ分けた優美なやきもので、当時の最高級品といえます。出土した碗は緑と白(実際には透明)の2色のうわぐすりをかけた二彩と呼ばれるものですが、奈良三彩のうち、二彩のもので碗という器種に限ると、正倉院に伝わる器を除き完全な形で出土したものは全国でも初めてとなります。そのような貴重品ですが、口の一部分を打ち欠き、半分に切断して重ねて置かれたような状況で出土しています。何かの「まつり」に伴う行為と考えられますが、どのような意味が込められていたのでしょうか。

そのほか、「奈野」と書かれた墨書土器が大量にみつかりしています。この遺跡のごく周辺に限って認められる特徴的な墨書文字ですが、ここに謎を解くキーワードが隠されているものと考えています。奈良三彩のうち碗などの大きめの器種は、とくに平城京などの大寺院で仏器として使われることが多かったようです。この二彩の碗は、おそらく平城京の大寺院を通して手に入れたものでしょう。「奈野」の文字には「奈良」との直接的なつながり、もっと踏み込んで、8世紀末から9世紀前半という時代背景を考え合わせると、平城京の大寺院の初期荘園と関係する集落、などという想像もふくらんでくる画期的な発見です。平城京に遷都して今年でちょうど1300年。思わぬところにも都の風が吹いていました。